

当たり前の壁

中 三

「えっ。何この家族。邪魔だなあ。」春休みのある日、私は久しぶりに電車に乗って母と出掛けた。車内を見渡してみると、普段と比べて家族連れが多く、楽しそうな笑顔が見られた。そして、車内は話し声でにぎやかだった。私も周りの人と同じようにウキウキとした気分だったが、そのような気持ちが一変する出会いがあった。

それは、私が車内で出会った四人家族のことだった。どこか他の家族と違う雰囲気を感じられた。けれども、私があることに気が付いていれば、このような気持ちにはならなかったのだ。

父と母、私より少し小さい子供が二人という、どこにでもいるような家族に見えた。私たちと同じでどこかへ出掛けるのだろうか。普通なら家族で並んで横一列に座席に座るだろうが、この家族は通路を挟んで二人ずつ向かい合わせで座っていた。最初は不思議だなあと思ったが、きつと話しやす

いからだろう。そしてこの家族は手をいっばいに広げている。何だろう。ジェスチャーが大げさなのかと思つたが度を超えている。家族の近くでスマートフォンを操作しながら立っていた男性は、通路へ飛び出してきた手を慌てて避けていた。「邪魔だなあ。」とその男性も思つたことだろう。露骨に嫌な顔をしていたのだから、気が付いていないのだろうか。「やめてあげればいいのに。」と思つたが、この家族は大げさなジェスチャーをやめることはなかつた。

十分くらい時間が経ち、もうすぐ目的の駅に着くというところだった。そのときの私は母との会話を夢中になつてしまひ、あの家族のことをあまり気にかけていなかった。会話をやめて降車する準備をしていると、その家族が視界に入った。そのとき、私は「あつ。」と心の中で声を出した。慌てて母に目線で合図をする。なぜなら、話をしたいから向かい合わせで座つたのだろうと思つていた家族が、一言も言葉を発していないことに気が付いたからだ。だから違う雰囲気が感じ取れたのかもかもしれない。その家族はとてもにこにこして、まるで会話をしているかのようにだった。大げさなジェスチャー、無言、向かい合わせで座って

いる、これらの共通点は何だろう。そう考えたとき、それらがパズルのように繋がった。「この家族は手話で会話をしているのだ。」と気付いた。そして同時に思ったことがある。それは、私が感じてしまったように、「当たり前という壁に悩み、誤解されながら生きているのではないか。」と。

私が今まで出会ってきた人に、言葉を発することが難しい、できないという人は、おそらくいなかった。だから、言葉を発することは当たり前であると感じてしまっていた。多くの人が、それは当たり前のことと考えているだろう。けれども、その当たり前をつくった人は誰だろうか。親だろうか。先生だろうか。友達だろうか。私は、それは自分の心にある、自己中心的な考え方がつくってきたのではないだろうかと思う。自分が今まで生きてきた経験や自分ができるからと思っただけにつけてしまっていたのだ。けれども、それは必ずしも全員ができる当たり前にはならないのだ。

私がこの十五年間で出会ってきた人はとても少なく、これから出会う人も世界の全人口と比べてわずかであることには変わらないだろう。人生の中で世界中の全員と出会うことは不可能だからだ。

私は、「今まで自分とそっくり同じ人間に出会ったことがあるか。」と聞かれたら、間違いなく「無い。」と答えるはずだ。だから、一つ分かることは、これから先も誰一人として、私と全く同じ考え方、能力というような、私をコピーしたような人間はいないということだ。だから、人によって得意、不得意があるのだろう。全ての人が私と違うところがあるからこそ、人と接していて楽しいことや嬉しいことがある。そして考え方や価値観などの違いで怒ったり、悲しくなったりすることもある。これは喜怒哀楽だ。当たり前という概念に囚われず、十人十色だからこそその違いがあってもよいのではないか。

電車から降りた後、私はあの家族に心の中で謝った。あの家族の目に私はどのように映っていたのだろうか。冷たい目をしていたに違いない。私は邪魔をされたのではなく、邪魔をしていたのだ。私が使ってしまった当たり前というものさし。この世の中は常にそれで測られ、生きにくいものだと思う。けれども、違うものさしをもった人たちが集まり、ときに誤解されながら一日一日をそれぞれが懸命に生きている。世の中の人々が当たり前

前という概念によって否定されることは、あつてはならない。今日も生きている。私たちの家族も、あの家族も。